

兵庫縣佐用郡久崎の蝶(2)

山 本 広 一

久崎産蝶類目録

1. ここに挙げた種類は筆者が過去10余年間に於て採集した72種の標本とその間確実に目撃した1種を基とし、これに井口宗平氏が発表された"佐用郡産蝶類及天蛾類の採集果"(1950年)其他の資料により一部を追加したものである。この点深く氏に敬意を表する次第である。

2. 目録中学名の上に※印あるものは今回本県より初めて報告される種類であり、和名に続く括弧内の名は井口氏が"葉"中に使用されたものである。該報文を見られる際の参考迄にと併記しておいた。

I Hesperidae セセリチョウ科

1. *Erynnis montanus* (BRÉMER, 1861)

ミヤマセセリ (チャマダラセセリ)

セセリ、チョウやシジミチョウの中には和名が時と共に変化し、混同しているものがある。そのため或一つの種類に多くの異つた名称があつたり、現在使用している和名と同じでありながら全然別な種類を指しているような場合がある。井口氏がさきに本誌上に於て発表なされた"葉"(1950年)中の種名もこうした意味で一応考えてみる必要があると思う。しかし中にはそれが現在の何種であるか判定出来ず、又筆者の標本の不備から思わぬ間違いを起したり、反つて混乱を生じて氏に御迷惑をかけるようなことがありはしないかと懸念している。

例えば、氏の挙げられたチャマダラセセリにしても、氏の標本を拝見せぬ以上何とも云えないが、直ちに現在のチャマダラセセリであると受けとることはむづかしい。高野鷹蔵氏の日本蝶名類纂(1907年)によるとチャマダラセセリの名は 1) *Hesperia maculatus* BREMER et GREY (ミヤマチャマダラセセリ) に使用された場合(松村博士・日本昆虫総目録)もあり、 2) *Hesp. maculatus* var. *zona* MABILLET (チャバネセセリ) に当てられた(宮嶋博士・日本蝶類図説、及其他)こともある。しかし又 3) *Erynnis montanus* BREMER (ミヤマセセリ) を指した例も、少くない(三宅博士・名和靖・長野・吉永・奥平・林氏等)のであつて、名和昆虫研究所に居られた長野菊次郎氏もその著"日本鱗翅類汎論"(1904年)に於て *zona* をチャマダラセセリと呼び、*montanus* をオオ

チャマダラセセリと云うと共にこれにチャマダラセセリの名を併記している。

zona (チャマダラセセリ) は最近 *maculata* (ミヤマチャマダラセセリ) の夏型であることが判つたので、現在では 1) と 2) とを合せてチャマダラセセリと称しているのであるが、これが久崎に産するかどうか筆者は現在のところ疑問に思つている。本種は日本の中部以北の山地に広く分布するものであるが、広島県下でも獲られたという記録があるらしいので、或はこの地方にも分布しており、既に誰かによつて採集されたことがあるのかも知れない。しかし筆者に関する限りにあつては今までの処採集したこともない。

ところで一方氏の報文中に普通である筈のミヤマセセリの名が見当らぬのはなぜだろうか。この点筆者は古く井口氏が名和靖氏等と御親交のおありだつたらしいことを思い合せて、氏の"チャマダラセセリ"は結局(3)のミヤマセセリを意味するものと考えて間違いないと思う。

本種は早春、山地に多数発生するものである。

2. *Daimio tethys felderii* BUTLER, 1881

ダイミョウセセリ

後翅に明瞭な白帯を装う所謂"関西型"のもので、5月頃より現われ、山間の路傍に少なからず見受ける。他のセセリチョウに比べ、飛翔は緩やかで容易に捕えることが出来る。

3. *Choaspes benjaminii japonica* (MURRAY, 1875)

アオバセセリ

溪流のほとりや樹蔭の湿地等に屢々見受ける。先年長野の滝の近くで多くの個体に出会つたことがある。光澤のある緑色を陽光に輝かせながら、敏活に花から花へと飛び交う有様はなかなか美しい。飛翔力は甚だ強く、捕獲は楽でない。

4. ※ *Aeromachus inachus* (MÉNÉTRIÈS, 1859)

ホシチャバネセセリ

山地性の種類で、高原の日当りよい草地等に見られる。筆者もよく浅間山麓の追分ヶ原等にて採集したことがあるが、個体数は少なく、分布も局地的なものらしい。形の小さい上に活潑であるため見逃し易い憾がある。

1942年6月下旬久崎部落より大釜への途中路傍の叢

の上で1頭を採集した。その後この珍種には絶えて巡りあうことがなかつたが、1950年6月24日大日山に於て第2回目の個体を発見した。この時蝶は道端の樹葉に静止しており、採集には最も手頃な位置にあつたので、慎重を期してネットを振つたのだが、好事魔多しで、網の底が附近にあつた茨にからみつき、網の口が塞がらず、折角揃つた逸物を逃してしまつた。しかし極めて近いところであり、地上約1米半許の場所での観察であるので、絶対に他種の見誤りではない。前後2回、県下にはこの地以外に採集したこともなく、珍らしいものである。

5. *Isoteinon lamprospilus* FEDER et FELDER, 1862
ホソバネセセリ (チャバネセセリ)

6. *Thymelicus sylvaticus* (BREMER, 1861)
ヘリグロチャバネセセリ

これも山地性のもので7月頃より出現しこの辺では甚だ普通の種類といえる。

7. *Ochlodes chracea rikuchina* (BUTLER, 1878)
ヒメキマダラセセリ

8. *Potanthus confucius flava* (MURRAY, 1875)
キマダラセセリ

9. *Halpe varia* (MURRAY, 1875)
コチャバネセセリ

10. *Polytremis pellucida* (MURRAY, 1875)
オオチャバネセセリ

次のイチモンジセセリと共に平地に多く、ハナセセリとも称せられ、種々の草花に集る。

11. *Parnara guttata* (BREMER et GREY, 1853)
イチモンジセセリ

(附 記)

1. セセリチョウの採集が不十分なため以上1'種に過ぎないが、今後尙追加されるものと信じている。

2. 井口氏は上記の他に "コキマダラセセリ" と "クロスジセセリ" の二種を挙げて居られるが、"クロスジセセリ" というのは現在の "スジグロチャバネセセリ" のことで、両種共本州の高地帯に少なくない種類であるが、筆者は現在この地に於て採集した標本を持合わざぬので、今回は目録より省略することとした。

II Papilionidae アゲハチヨウ科

12. *Melelaidis alcinous* (KLUG, 1836)
ジャコウアゲハ

13. *Papilio machaon hippocrates* (FELDER et FELDER, 1864)
キアゲハ

14. *P. xuthus* LINNE, 1767 アゲハ

15. *P. helenus nicconicolens* BUTLER, 1881
モンキアゲハ

筆者は今までに神戸市(六甲・須磨)・明石市・印南郡城山・加東郡清水山・多可郡笠形山・多紀郡篠山町・朝来郡神子畑・城崎郡香住町其他で目撃したり採集したことがある。熱帯系の蝶ではあるが、県下には相当広く分布することが現在では判つている。

扱て本県でこの蝶を初めて記録されたのは190年東郷隆次氏の神崎郡船津村産のものであろう。次で1903年、中川純氏が姫路市下寺町から報告されている。

1906年井口氏は久崎に於ける本種の記録を昆虫世界VOL. X, P. 424に寄せて「本年8月下旬我家(註・久崎町柳田)より数丁を距る森林の西北蔭なるジブライ草(方言)と称する百合科植物の花蜜を吸収しつつあるを発見す。その後9月3日又もや之れを半里を距つる久崎校の門前に見……」と述べられているが、恐らく本県第3の記録であると思う。これによると氏は2回に亘つて認められたわけであるが、兵庫生物第4号(1950年)の「栗」には「一回見を限りで」と往時を述懐して居られるので、察するところ1906年の観察以来再びその機会をもたれなかつたのだろう。当地としては極めて稀な種類である。

16. *P. profenor demetrius* CRAMER, 1782

クロアゲハ

17. *P. bianor debanii* FELDER et FELDER, 1864

カラスアゲハ

18. *P. macilentus* JANSON, 1877

オナガアゲハ

前二種と共に山間の溪流附近に少くない。毎年5月中旬より春型が久崎の裏山や滝谷の谷間に現われて、所謂蝶道に沿つて一定のコースを飛んでいる。流れを挟んで点々と咲くツツジの花を訪れながら裏地から下つてくる蝶を茂みに潜んで次々に採集していつた愉快な往時の記憶が浮んでくる。今では個体数の減少した憾があるが、それでもかなりの数が見受けられ、他所では余り捕れないといわれる雌が容易に得られるのは有難い。

19. *Graphium sarpedon nipponum* (FRUHSTORFER, 1908)

アオスジアゲハ

個体数は少いが、路傍の水溜りや、ネギ畑等に見られる。

(附 記)

1. ウネバシロチョウ

曾て久崎のラベルの附いた本種を見たことがある。筆者が久崎を蝶の有望な採集地と目してここに歩を入れるようになった一つの動機は本種を採集することにあつたので、何とかしてその居場所をつきとめようと努めてみたのであるが、遂に発見することが出来なかつた。ところが最近井口氏の記事によつて西庄村に豊

産することがわかり、早速二回ばかり同地へ出かけて行つたのだが、いつも天候状態が悪く未だ目的を達していない。この蝶のいるという西庄村の小日山部落は、久崎町大日山と隣接し、道路を以て続いているので、小日山辺で採集されたものが久崎の蝶として間違つて取扱われたものに違ひなからう。

2. ギフチョウ

ギフチョウがこの地方から採集された記録はなく、隣の岡山県下からの報告もない。しかし、その出現が春早く、且その期間が比較的短いため一般の目に触れにくく、調査も行届いていないのかも知れない。

1950年4月中旬植物採集をかねて県境を歩いたが、その際大日山と向坂との分れ目附近で沢山のカンアオイを認めたことがあり、或はギフチョウも発生するのではないかと思つている。

III Pieridae シロチヨウ科

20. *Eurema hecabe mandarina* (DE L'ORZA, 1869) キチヨウ

21. *E. iaeta bethesba* (JANSON, 1878) ツマグロキヨウ

山地に産し、極めて少ない。

22. *Gonepteryx mahaguru nipponica* VERITY, 1909 スジボンヤマキチヨウ

井口氏が「ヤマキチヨウ」と記されているのは本種のこと、久崎にはヤマキチヨウ (*G. rhamnii maxima* BUTLER) は居ない。6月頃の採集によく樹間の下草辺から飛び立つのを認めたが、最近では非常に減少したらしく、久崎の谷ではここ数年間採集することが出来ない。

23. *Colias hyale poliographus* MOTSCHULSKY, 1860 モンキチヨウ

24. *Antilocaris scolymus* (BUTLER, 1866) ツマキチヨウ

25. *Pieris rapae crucivora* BOISDUVAL, 1836 モンロチヨウ

26. *P. melete* MENETRIES, 1857 スジグロシロチヨウ

IV Lycaenidae シジミチヨウ科

27. *Curetis acuta paracuta* DE NICEVILLE, 1901 ウラギンシジミ

28. *Arhopala japonica* (MURRAY, 1875) ムラサキシジミ (ルギンシジミ)

古くはムラサキシジミのことをルリシジミと呼んでいた。井口氏の記された「ルリシジミ」も現在のルリシジミではなく、ここに挙げたムラサキシジミであることは、氏の説明にもある通り幼虫がカシの葉を食す

ることで明らかである。成虫のまま越冬するので、早春翅の汚損した個体が食草の附近で採集される。

29. *A. pryeri* (MURRAY, 1873)

ウラゴマダラシジミ (ウチムラサキシジミ)

別名「ウチムラサキ」。井口氏の「ウチムラサキシジミ」に相当するものと思う。6月初旬から現われ、個体は比較的少ない。

30. *Japonica lutea* (HEWITSON, 1865)

アカシジミ (ツマグロアカツバメ)

31. *J. saepestriata* (HEWITSON, 1865)

ウラナミアカシジミ (ウラナミアカツバメ)

32. *Antigius attilia* (BREMER, 1861)

ミズイロオナガシジミ

33. ※ *A. butleri* (FENTON, 1881)

ウスイロオナガシジミ

本種は以前久崎の谷で相当個体採集することが出来た。筆者が最初見つけた場所はカシワ林に接した杉林中であつたが、そこは現在全く拓かれて昔の面影はない。しかし、附近の急峻な山腹に茂つたカシワ林には尙棲息するので採集は出来るが何分足場の悪いため必ずしも楽なことではない。

筆者はその後但馬の氷ノ山でも1頭採集したが、その他に県下での産地を知らない。珍らしい種類で、これも本県よりの未記録種である。

34. *Favonicus saphirinus* (STAUDINGER, 1887)

ウラジロミドリシジミ

産地の限られたこの珍種が豊富に産することは誠によろこばしい。カシワ樹の葉上をとぶ姿は採集家をして垂涎せしめるところであるが、地の不利は採集の困難さを思わせる。それでも少し頑張れば十数頭は得られよう。目下県内ではこの地以外には認められず、曾て関西昆虫学会の雑誌に紹介されたように記憶しているし、又筆者が陸井初治氏の許に差出した書簡の一部(ウラジロミドリシジミの久崎に産すること)が兵庫県博物学会報(1931年)に転載されたこともあるので、一部ではその存在が認められていたと思うが、地の不便なためか余り採集に訪れる人もない。

35. *F. orientalis* (MURRAY, 1875)

オオミドリシジミ

6月10日頃より出現する。久崎の谷ではクヌギの少いたためか、他の近縁種に比して個体数は多くない。

36. ※ *Favonicus* sp.

1934年6月17日初めて久崎の谷で数個体を採集した。既知の近縁種との間に少なからぬ相異点があつて、恐らく新種であろうと考えられるので、更に多くの個体を獲るために毎年6月中下旬には必ず一度の

採集を試みた。其後も僅かずつではあるが、捕えることが出来たので、それらは同好の方々へ送附しておいた。そのうち時局の急変に伴つて採集にも一頓挫を来し、又最近には採集地の様子が変わつたので、唯今では採集は甚だ望みろしくなつてしまつた。そのため僅かに3合合、1♀が手許に残つているだけであるが、これに基いてその特徴を記載してみる。

合：翅の表面は光沢ある金属緑色を呈し、前翅の外縁にある黒帯は細く、裏面中空端の横帯は明瞭（稍々不鮮明のものもある）で、後翅後角部にある二個の橙色紋が互に分離（1個体では僅かに連なる）している等の点に於て前種オオミドリシジミ（*F. orientalis* MURRAY）に酷似している。

然し次の相異点が認められる。

- (1) 翅の表面は前種のような藍緑色ではなく寧ろ金緑色を帯び、殊に後翅に於て顕著である。（個体により藍緑色に近い場合もある。）
- (2) 後翅外縁にある黒色帯は幅広く、前種のように第3脈より上で急に細くなることはない。ただ幾分第3～6脈間が狭まるかと思ふ程度で、大体に同幅である。
- (3) 翅の裏面は前種のような灰白色ではなく、銀灰色に近く、この相異は相当に著しい。従つて前後翅にある白帯並に外縁に沿う白斑は前種の場合よりもその鮮明さを失う嫌いがある。
- (4) 裏面の白帯の幅は明らかに広い。個体によつては白帯の外縁が流れて地色との境が不鮮明となり、一層その幅の広く感じられるものもある。
- (5) 裏面の白帯にはその内縁に顕著な灰色条を有して前種を想わせる場合もあるが、全くこれを伴わぬものもある。
- (6) 前翅裏面の白帯は前縁より起つて第Ⅱ室に終り、第Ⅱ室では全く欠如するか痕跡的である。又白帯が灰色縁取を伴う場合、灰色条は必ず第Ⅲ室で止り、第Ⅱ室では認められない。
- (7) 後翅裏面の白帯は前種のようにその縁が小刻な凹凸をなさず、概して滑らかである。
- (8) 尾状突起は前種に比べて稍々短い。

♀：翅表はオオミドリシジミの♀に極めて酷似しているが

- (1) 翅裏面は一層灰白色を帯びている。
- (2) 裏面の白帯並にその内縁に添う灰色条は何れも巾広く、全体として鮮明な感じがする。

〔♀、合共に1934年6月17日 久崎町久崎に於て筆者採集〕

最近林慶二郎氏が日本蝶類解説（1951年）に新種と

して記載されたハヤシミドリシジミ（*Fovonicus* sp.）はその棲息地の条件が酷似しており、中室の横帯や白帯縁の灰色条の有無其他について多少の差異が窺われるが、一致点が少くない。

本種にはかなりの変異があるらしいので、更に多数の標本を得て詳細な調査を行いたいものと希つている。

37. *Papala arata* (BRÉMER, 1861)

トラフシジミ

38. *Alibergia ferrea* (BUTLER, 1868)

コツバメ

39. *Spindasis takanonis* (MATUMURA, 1906)

キマダラルリツバメ

井口氏によると曾て高見筆太郎氏によつて2頭が久崎より採集された由である。本種は古く県下竜野にて捕獲され（博物の友、Vol. 2, No. 14）、それに基づいて記載された珍種であつて、鳥取市に於ては1934年天然記念物に指定されている。これが遠く距たぬこの地で再び発見されたことは何としても喜ばしい。隣接する岡山県三國村からの記録もあることから、今後も採集されるに違いない。

40. *Lycaena phlaeas daimio* (SEITZ, 1909)

ベニシジミ

41. *Taraka hamada* (DRUCE, 1875)

ゴイシシジミ（ゴマダラシジミ）

42. *Lampides boeticus* (LINNE, 1767)

ウラナミシジミ

43. *Zizeeria maha argia* (MENETRIES, 1857)

ヤマトシジミ

44. *Zizina otis alope* (FENTON, 1881)

シルヴァリアンシジミ

タイワンコシジミともいう。1922年中原和郎博士が井口氏の採集された久崎産の3合合、2♀♀（1920年7月の採集）に基づいて発表されたものである。その色彩や斑紋がヤマトシジミに酷似している上に、棲息地に於ては互に混在しているので長らく人々の注意を惹かなかつたのである。

しかし詳細に調べると、1) 後翅裏面の外縁より3列目の黒斑列はヤマトシジミのように正しく孤状とならず、第6室の一斑が第7室の殆んど直下に位置すること。2) 前翅裏面の中空の一黒点とその直下にある第1室基部の一黒点とを欠如すること等によつて区別することが出来る。

最近本種への関心が高まるにつれて、急に各地よりの報告がもたらされ、広く分布するものであることが判明したのであるが、食草に制約されて棲息場所は甚だ

局限されている。

45. *Celastrina argiolus ladonides* (DE L'ORZA.

(1869) ルリシジミ (シジミチョウ)

最も普通な種類で、到る処の路傍に見られる。井口氏の報文中にある "シジミチョウ" は現在のシジミチョウ (*Lycaena argus* L.) = 最近に至つてヒメシジミとミヤマシジミの混合であることが明らかとなつた。一ではなく、ここに挙げたルリシジミのことである。そして前記の様に "ルリシジミ" と書かれたのが反つて本種ではなくてムラサキシジミであつて、現在の和名に照して同様なものがあるからといつて素直に受取つては思わぬ間違を起すこととなる。

所謂 "シジミチョウ" はこの附近には棲息しない。

(附 記)

1. 調査の行届かぬ点もあり、今後更に数種が追加されることと思う。

2. 井口氏の報文中にはこの他に "アカツバメチョウ" と "オオシジミチョウ" の2種が挙げられている。前種は "ムモンアカシジミ" のことで、他のアカシジミに比べると著しく産地が局限され、中部以北の地に多く、この附近には見受けない。又後者については "7月頃山林中に採集される" 由であるから、所謂 *Zephyrus* に属するものではないかと思うが、目下該当種が見当らぬため、後日の調査に俟つこととして、目録から除外することとした。

V *Libytheidae* テングチョウ科

46. *Libythea celtis celtoides* FRUHSTORFER.

1909 テングチョウ

VI *Danaidae* マダラチョウ科

47. *Caduga tytia nipponica* MOORE, 1883

アサギマダラ

VII *Nymphalidae* タテハチョウ科

48. *Argynnis paphia paphioides* BUTLER, 1881

ミドリヒヨウモン

49. *A. sagana liane* FRUHSTORFER, 1907

メスグロヒヨウモン

50. *A. anadyomene midas* BUTLER, 1866

クモガタヒヨウモン

51. *A. cydippe pallescens* BUTLER, 1873

ウラギンヒヨウモン

52. *A. nerippe* FELDER et FELDER, 1862

オオウラギンヒヨウモン

53. *A. raslana* MOTSCHULSKY, 1866

オオウラギンスジヒヨウモン

54. *Limenitis camilla japonica* MENETRIES, 187

イチモンジチョウ

55. ※ *L. glorifica* FRUHSTORFER, 1909

アサマイチモンジ

1951年6月3日 久崎町大日山にて得たもので、本県内で筆者が得た第2回目の標本である。本州の北部地方より中部に亘つて分布し、産地は限定され本県より採集された記録はない。イチモンジチョウと混在し、飛翔中の区別は困難であるが、前翅の中室にある白斑及び中央白帯の第Ⅲ室にある白斑が明瞭で大きく、且第Ⅱ室の白斑が第Ⅰ室より著しく外方に存することで識別することが出来る。

56. *Neptis aceris intermedia* W. B. PRYER, 1877

コムシジ

57. *Araschnia burejana* (BREMER, 1861)

サカハチチョウ (ヒメイチモンジチョウ)

本種は発生の季節により3つの型が知られている。筆者は春型 (form. *burejana*) と夏型 (form. *fallax*) とは今までに相当量採集したのであるが、中間世代型と云われている form. *strigosa* は採集時期の関係から未だ獲たことがない。久崎の谷では近頃著しく減少している。

58. *Polygonia c-aureum* (LINNE, 1758)

キタテハ

59. *Kaniska canace no-japonicum* (VON SIEBOLD 1824)

ルリタテハ

60. *Nymphalis xanthomelas japonica* (STICHEL, 1902)

ヒオドリクチョウ

近似のタテハ類中最も多い種類の1つである。往時野遊びの学童に教えられて、久崎町の町はずれのエノキ樹で多数の蛹を採集して持帰り飼育したことがある。

61. *Vanessa indica* (HERBST, 1794) アカタテハ

62. *V. cardui* (LINNE, 1758) ヒメアカタテハ

63. *Diclorragia nesimachus nesiotus* (BOISDUVAL, 1886)

スミナガシ

64. *Apatura ilia substitutata* BUTLER, 1873

コムラサキ

65. *Hestina japonica* (FELDER et FELDER, 1862)

ゴマダラチョウ

66. *Sasakia charonda* (HEWITSON, 1863)

オオムラサキ (ムラサキチョウ)

長野の滝下流の山林中で得られる。1950年大日山の谷に於ても1回目撃した。飛翔が速く捕えにくい、ゴマダラチョウ・コムラサキ等と同様樹液に集るので、こうした機会には比較的容易に採集が出来る。

(附 記)

1. ミスジチョウ

(以下167頁へ)

強く剪定を受けるのが惜しい。この年切れというのは果樹に隔年結実があるように、花が咲いても蜜がとれない(養蜂家は流蜜しないという)ことをいう。我が国のクリ、ビワなどがこの例の著しいもので、隔年流蜜する。ドイツの有名なボダイジュ (*Tilia grandifolia* 及び *T. parvifolia*) は又有力な蜜源植物であるが、数年に1度しか流蜜しないと同地の養蜂家は嘆いている。

クロガネモチの属するモチノキ科にはよく流蜜する木が多い。ソヨゴ、モチノキ、ウメモドキ、キツコウツゲ、イヌツゲ、タラヨウ、ナナミノキなど養蜂家によく知られたものが多い。このうち、ソヨゴの蜜は以前からよく知られていたが、その他のものは不明であった。昭和26年筆者はこのうちのクロガネモチとイヌツゲとの蜜を発表した。アメリカでもモチノキ科は約10種の蜜源植物が知られて居り、何れも上蜜を産するという。

この木の天然記念物になつて居るものが2つある。1つは芦屋にあり根本周囲4.9m、地上1.5mの所の周囲3.5、樹高20mとある。も1つは松江城内大手前通にあり、根本周囲4.25mとある。(日本巨樹名木図説1930年)。筆者は残念ながらまだみる機会に恵まれない。神崎郡の最大のものは田原村辻川、松岡医院の庭に目通り周囲1.8mある雌樹であろう。この木は火にも強いとみえ、焦土となつた姫路市の戦災跡に平然と

立つていた。

ブラナナスやイチヨウに代つてトチノキ、シナノキ、クロガネモチなど蜜源植物を道路や公園に、お宮やお寺のマツやスギのあとへこんな木を、と我々養蜂植物研究家が常に唱えているが、これもまだ広く当局に受入れられない。この点ドイツは国が先に力を入れている。植えることに協力してくれなければ、せめて切り倒さずに保護して頂きたい。筆者の小さな例ではこの願いがきき届けられて喜んでいる。1つは神姫バス福崎停留所前のこの大木が切り倒される運命にあつた時、理由をのべたところ願ひによつて今保護されているし、も1つは姫路城内大手門と菱の門の中間のこの雌の木がやはり筆者の願ひにより悪童から守られて、説明もつけられている。

どうか養蜂家だけのためではなく、冬の小鳥のためにも、郷土に多いこの木を保護されたい。(27. 12, 6)

参考文献

- 日本の養蜂植物 (関口喜一) (1949)
 American Honey Plants (F.C. Pellett) (1947)
 Archiv Für Bienenkunde (1951)
 American Bee Journal (1951—1952)
 月刊ミツバチ (Japanese Bee Journal)
 その他
 (筆者、開業医、神崎郡福崎町)

(157頁より続く)

本県下での産地は局限されており、7月頃出現する。井口氏によると櫛田滝に至る途中の山道に居る由、筆者も本種を目的に7月の中旬と下旬との二回に互つて同地域を探したが失敗に終つた。氏は特に「7月」櫛田滝云々」と時期と場所を限定して説明を加えられているので(コミスジならば春より秋まで各地に居り極めて普通である)現在のミスジチョウと素直にとつてよいと思うのだが、「栗」中に「コミスジ」の名が挙げられていないので、実物を確かめるまで保留しておきたい。それは現在のコミスジをミスジチョウと呼んだ例は稀でなく、名和氏も *Neptis aceris* に明らかにミスジチョウの和名を当てられている。そして現在のミスジチョウを「ハヤシミスジ」というのが普通であつたからである。

Ⅷ Satyridae ジャノメチョウ科

67. *Ypthima argus* BUTLER, 1878

ヒメウラナミジャノメ

68. *Y. motschulskyi* (BREMER et GREY, 1853)

ウラナミジャノメ

前種のように普通ではないが、6月頃山間の叢中で

採集出来る。

69. *Satyrus dryas bipunctatus* (MOTSCHULSKY, 1860)

ジャノメチョウ

70. *Lethe sicelis* (HEWITSON, 1862)

ヒカゲチョウ

71. *L. diana* (BUTLER, 1866)

クロヒカゲ

72. *Aranda epaminondas* (STAUDINGER, 1877)

キマダラモドキ

山地性の極めて珍しい種類で、長野滝下流の池畔に産する由、筆者は久崎の西の谷で1頭を採集したことがる。

73. *Neope goschkevitschii* (MENETRIES, 1855)

キマダラヒカゲ

74. *Mycalasis gotama* MOORE, 1857

ヒメジャノメ

75. *M. francisca perdiccas* HEWITSON, 1862

コジャノメ

76. *Coenonympha oedippus annulifer* BUTLER, 1877

ヒメヒカゲ

余り多くはないが6月中旬頃山地に出現する。